

## 「書く」ことによる学生の自己形成 —文章表現「パーソナル・ライティング」の実践を通して—

谷 美奈

現在、わが国の大学における文章表現教育は、発展期の段階にあるとされている。そこでは、大学における「書く」ということが、学生あるいは人間にとってどのような意味を持つものなのか、といった根源的な問いと向き合い、その具体的な試みを大学教育に位置づける時期にきている。すなわち、テクニカルな能力を磨くだけでなく、言葉で思考し表現することを通して自己を認識するという内的にして知的な行為を含むものが「書く力」とであると認識され始めている。もしも、文章表現の問題がテクニカルな意味における文章指導に限定されているとするのなら、大学教育における文章表現の「現代的意義」が見失われるおそれがあるのではないか。言葉で思考し表現することで自己を認識する、そのような学びをどのように学生に経験させることができるのか。さらには、そうした文章表現教育が、どのような教育的効果をもたらすのか。このような問題を検討するために、本研究では、大学教育における伝統的なアカデミック・ライティングの相互補完として捉えられる、新しいタイプの文章表現である「パーソナル・ライティング」の教育実践に着目した。

本論文は、序章とそれに続く五つの章および終章で構成される。序章は、「(1) 日本の大学における文章表現教育の現状と課題」「(2) 本研究の目的と方法」「(3) 本研究の構成」の三つの項から構成した。

まず、日本の大学における文章表現教育の動向から課題を抽出した。現在、わが国の大学における文章表現教育は、発展期にあるとされている。当初はレポートの書き方や論文指導がその代表とされてきたが、現状ではほかにも多様な指導が各大学で模索されており、文章表現教育のあり方についての課題は今後も大きいとされている。このような問題を検討するために、アカデミック・ライティングの相互補完と捉えられる、新しいタイプの文章表現であるパーソナル・ライティングの実践を研究の対象とした。つぎに、米国の大学で創出された **Personal Writing** の教育実践研究に着目した。**Personal Writing** とは、1970年代にマサチューセッツ大学アマースト校のピーター・エルボウ教授らによって創出された文章表現教育であり、学生、広

くは人間にとって「書く」ということはどういう行為でどのような意味のあるものなのか、このような根源的な問題と向き合うことから生まれ、実施されてきたものである。一方、わが国では、大学における **Personal Writing** の教育実践は周知されていないが、国内の教育実践研究としては、筆者が提唱する「パーソナル・ライティング」があげられる。その特徴は、自己省察（自己と対象の「掘り下げ」と「とらえ返し」）といった思考方法に主眼を置くこと、および単なる文章作成の技術的向上にとどまらず、他者と表現行為を交換することにある。

以上から、大学教育における「書く」ことの教育について、以下のような問題を立てることができる。パーソナル・ライティングとは何か、また **Personal Writing** との違いはどこにあるのか。現在の大学教育においてアカデミック・ライティングが主流であるなかで、パーソナル・ライティングを実践することの意義はどこにあるのか。パーソナル・ライティングの指導はどのようになされるのか。パーソナル・ライティングを通じて学生はどのように変容したのか。パーソナル・ライティングは学生の発達（=自己形成史）にとってどのような意味をもちうるのか。このような問題から本論文の目的は、現代の大学教育においてパーソナル・ライティングを実践する意義について明らかにしようとするものである。

本論文では以下のような方法で論究を行う。まず、アクションリサーチによる実践研究を行う。筆者がパーソナル・ライティングを開発するうえで前提となった課題について論じ、具体的な指導方法を明らかにしたうえで、授業の成果物である学生の作品の分析とクラス内全体の成績評価等の分析を行う。さらに、パーソナル・ライティングを受講した数年後（卒業後）の学生へのインタビューによる追跡研究を行う。

（なお、本論文は、米国におけるパーソナル・ライティングはアルファベットで **Personal Writing**、筆者の実践しているパーソナル・ライティングはカタカナで記す。）

第一章は、「米国の大学における文章表現教育の変遷と **Personal Writing** への着目」と題し、「第1節 二つの異なる文章表現教育」「第2節 米国の大学における **Personal Writing** の教育的価値」「第3節 **Personal Writing** とパーソナル・ライティングの共通点と相違点」の三つの節から構成した。

まず、米国の大学教育における文章表現教育の歴史を概観し「表現主義」をキーワードに、米国の大学で **Personal Writing** が誕生するまでの背景を論じた。そのうえで、米国の大学で1990年代頃から本格的に拡がりはじめた **Personal Writing** が、大学教育における伝統的な **Academic Writing** と比較してどのような教育的な価値を持つものなのかを、1990年代に繰り広げられた論争 “**Personal Writing vs. Academic Writing**” を考察することで明らかにした。つぎに、**Academic Writing** と **Personal Writing** との思考様式を比較することで、**Personal Writing** の特性を明らかにした。つぎに、米国における代表的な **Personal Writing** 研究から、現代の米国の大学に **Personal Writing** を導入する意義と課題点について論じた。さいごに、米国の大学における **Personal Writing**、とくにエルボウに代表する **Personal Writing** と筆者が提唱するパーソナル・ライティングの共通点と相違点について比較検討した。

第二章は、「『書く』ことの現代的意義」と題し、「第1節 〈考える〉主体の形成」「第2節 学びの起点としての〈私〉」「第3節 表現＝作品化の教育論的意味」の三つの節から構成した。

ここでは、日本の大学教育においてパーソナル・ライティングの開発を試みる前提となった課題について検討した。第一の課題は、「学生の文章力低下」についてである。近年の学生の文章力低下の要因を探るために、おもにイヴァン・イリイチの「リテラシー」の思想を援用することで、この問題を考察した。その結果、学生の文章力低下は、たんなる技術的な習得の問題だけではなく、現代社会の環境変化によってもたらされるものであり、学生の学びの主体形成が有効に実を結ばないことに起因することを明らかにした。さらに、学生の損なわれた「言語的思考」の慣習を確立するため、「書く」（＝「考える」）営みを回復する必要性とその方策について検討した。第二の課題は、現代の学生の特徴として指摘されがちな「自己認識や社会認識の未確立」や「学びの主体の未形成」という問題である。ここでいう「学びの主体形成」とは、たとえば金子元久の主張する、大学の学びに必要な学生の「かまえ」に不可欠な「自己認識」と「社会認識」に相応するものである。つぎに、これらの問題をふまえて、パーソナル・ライティングが書き手の主観（＝「パーソナルなもの」）を第一義とする教育理念について、その有効性を検討した。その結果、「書く」という経験を通して〈私〉を考え、〈私〉を見つめる新たな学び、換言すれば「〈私〉をとらえ返すための知」が、現代の学生には求められることが明らかになった。さいごに、パーソナル・ライティングが、たんなる作文ではなく「作品化」をめざすことの教育論的な意味について検討を行った。

第三章は、「目標達成へのプログラム」と題し、「第1節 パーソナル・ライティングの理念と実践」「第2節 文章記述の生成プロセス」「第3節 作品と批評」の三つの節から構成した。

ここでは、先に検討してきた課題に対して実際の教育現場ではどのように取り組んだのか、パーソナル・ライティングの教育実践プログラムについて論じた。パーソナル・ライティングでは、学生個人の記憶や体験を題材にエッセーを書く取り組みを行う。題材探しに始まり、メモ作り・下書き・推敲という4つのステップをふんで一つの作品を仕上げた。教員は対話者として学生の相談相手になり、ヒントやサジェスションを与え、添削し、返却するスタイルを取った。つぎに、文章記述の生成プロセスについて説明した。4つの作業ステップにおいて最も重視するのが推敲であった。修辞上の練り上げ・磨き上げにとどまらず、作品の自己批評が推敲においては最も重視された。その際、一つひとつの叙述を「掘り下げ」、素材にした記憶・体験の書き手にとっての意味をあらためて「とらえ返す」ことが中心作業となった。さいごに、パーソナル・ライティングの実践理念である「作品と批評」について論じた。書き上げられた作品は、教員による添削・コメントが付されて学生に返却された。そのなかから佳作が選定され、佳作文集に掲載されるとともに、作者が自作朗読でクラスメートに対して発表した。

さらには、同人誌を制作するグループワークも行われた。これらの一連の取組みによって、学生は「他者を意識して書く」「文章表現＝作品化」というパーソナル・ライティングの実践理念を次第に体得できるようになった。

第四章は、「パーソナル・ライティングの成果物と教育的効果の検討」と題し、「第1節 自己認識のあり方」「第2節 表現者としての自己形成」「第3節 世界観の萌芽」「第4節 教育効果の検討」の四つの節から構成した。

ここでは、パーソナル・ライティングの教育実践プログラムを通じて、学生の自己認識がどのように深化・拡張していったのか、学びの主体形成のあり方について検証した。その方法として、学生の作品を検証の対象にすえ、「推敲」の鍵となる「掘り下げ」と「とらえ返し」を評価の中心に、学生の自己認識を核として他者・社会認識といったもの（の萌芽）にもスポットを当てた。具体的には、質的評価研究の方法論のひとつであるE・アイズナーの「教育的鑑識眼」と「教育的批評」を適用し、作品分析を提示し、学生の認識の深化・拡張を検証した。まず、2011年度の実践から、実例としてAくんの自己認識の深化・拡張の軌跡を取り上げた。つぎに、Bさん、Cさんの自己認識の深化、あるいは他者認識への道のりを事例として取り上げた。つぎに、学生の他者観・言語観・社会観の萌芽を示す実例として、Cさん、Dさん、Eくんの作品例を示した。これらの実例に共通するのは、既存の理念、公共的な規範、知識を外部から注入する方法に拠らずとも、経験や記憶、日常生活体験のなかの実感を「掘り下げ」、「とらえ返し」ことによって自己を深く知り確かめることができること、および、そのことが他者観・言語観・社会観の自発的な形成に結びつきうることである。さいごに、事例の対象となった学生が在籍した2011年度のクラス全体の課題評価分布と学生の自己評価アンケートを分析した。以上の考察から、パーソナル・ライティングの教育実践は学生における学びの主体形成に少なからず寄与するものであり、豊かな汎用可能性を示しうるものであることが明らかになった。

第五章は、「自己形成におけるパーソナル・ライティングの意味」と題し、「第1節 後期近代社会とパーソナル・ライティング」「第2節 元学生（当事者）への聞き取り調査」「第3節 新しい学びとしてのパーソナル・ライティング」の三つの節から構成した。

ここでは、パーソナル・ライティングによる「書く」経験が、学生の「自己形成史」にどのような「意味」をもたらしたかを、長期的なスパンから明らかにした。はじめに、この調査をするにあたって前提となる問題の背景について論じた。アンソニー・ギデンズは、後期近代社会に生きる人々は「自己の再帰的プロジェクト」を推進し継続させることで、その「時代を生き抜く」可能性を示している。それは、自己の物語を自分自身で省察し修正を加え理解していく力であり、「自己の物語を再帰的に進行させる能力」（＝「自己形成」を進行させる能力）と呼ばれるものである。それはまた、近年、「21世紀を生きる新しい能力」が教育目標として注目されていることに通底するものである。また、そのような「時代性」と「能力」との課題

意識に立って、マルシア・バクスター・マゴルダは「セルフ・オーサーシップ」という概念を、大学生から社会人への自己形成史を主題とする調査研究によって提出している。このような問題意識から、大学教育がパーソナル・ライティングを実施することによって、後期近代社会に生きる学生の「自己形成」を促す学びを提供しうるのではないかと、という仮説が立てられた。この課題を検討するために、2011年度大学初年次生に実施したパーソナル・ライティングの元受講者15名に対して、パーソナル・ライティングが彼らの自己形成にどのような意味をもたらしたのか、についての聞き取り調査（2015年4月～2016年7月に実施）を実施した。分析の結果、元学生にとってのパーソナル・ライティングの「意味」とは、「私の内なる声」を発見し、自己理解や他者理解が促され、そのことによって、学びのなかで自分の居場所や安心感を見出すことができるようになる、ということであった。それはまた、学びや人生へと連繋する「自分のモチーフ」が創出されることと同義となる。以上のような考察から、パーソナル・ライティングは、元学生の人生と学びのあり方を創造していく、自己形成を促す学びである、ということが確認された。

終章では、これまでの検討から、「第1節 大学教育におけるパーソナル・ライティングの現代的意義」「第2節 本研究の限界と今後の課題」の二つの節で構成し、本研究の成果と本研究の限界および今後の課題についてまとめた。

本研究の成果は、現代の学生の「文章力低下」は、大学教育の学びにおいて必要な学生の意識（自己認識）との乖離にその原因を求められること、また、そこでは「学びの主体の未形成」という問題があり、この課題を解決するためにパーソナル・ライティングの教育実践が有用であること、さらには、パーソナル・ライティングが、後期近代社会に生きる学生の「自己形成史」を促す学びであること、が明らかになった点にある。

本研究の限界は、パーソナル・ライティングが大学教育における専門学術的なテーマとどう関わっていくのかが具体的に示されていないこと、また、分析の対象となった作品数や学生数が少なく、学生の語りという定量化しにくい対象を扱ったために、パーソナル・ライティングの教育効果の一般化がなされにくいところにある。よって、今後の課題は、パーソナル・ライティングの経験が専門学術的なテーマとどうつながっていくのかの実践研究と、追跡調査をより精緻化するために、たとえばライフストーリー・インタビューにおける多次元の時間軸を扱う分析指標などの開発に着手することである。